



Q：先日、「オウム病」で妊婦さんが亡くなったとの報道がありました。

A：オウム病は本来鳥類の病気で、オウム病クラミジアという細菌による感染症です。オウムから初めて分離されたことからオウム病と名付けられました。ニワトリ、アヒル、ガチョウ、ハト、インコ、さらに野鳥などでも感染が確認されています。一見健康な鳥でも数割は保菌していると言われ、病気などで弱ったときやヒナを育てる期間に排菌しやすく、糞便や喀痰中に排菌して感染源となります。鳥かごの掃除をする時にほこりと一緒に吸い込んだり、

口移しで餌をやる行為などでヒトに感染することがあります。潜伏期間は1〜2週間で、急激な高熱で発症し、咳などの感冒様の症状を示し、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛、関節痛などがみられます。さらに気管支炎、肺炎を起こし、治療が遅れると髄膜炎、多臓器障害などを合併して死亡することもあります。テトラサイク



リン系の抗菌薬で早期に治療をすれば経過は良好ですが、重症肺炎や合併症を起こした場合には入院して全身管理が必要で

(岡田俊一・おかだ内科クリニック院長、甲府市北口2-9-12、ニッコー北口駅前ビル2F)

☎0555・2888・1801